2019/6/16　中原キリスト教会　礼拝

　　　　　　　　　　**幻における登場人物**

聖書箇所：ダニエル書12:1－13

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日は、ダニエル書における黙示に現れる登場人物がどのような存在として描かれており、それが新約においてはどのように扱われているか、を見たいと思います。ダニエル書と黙示録はよく比較され、黙示録は新約におけるダニエル書である、といわれることもあります。ダニエル書に現れる幻の人物たちは新約において新しい意味をもって再登場しており、単なる繰り返しではありません。

まず、ダニエル書における黙示の時代背景を理解しておきたい、と思います。ダニエル書は大きく２つに分かれます。1-6章を歴史的部分と称しますが、これは新バビロニアの捕囚の民となってイスラエルの人々が、迫害の中を神の奇跡的力により生き延びる物語です。王の夢の説き明かしをするとか、火の炉に投げ込まれたダニエルの友人3人が生きてそこを出てくる話し、とか獅子の穴に放り込まれたダニエルが、何事もなかった如く、穴から出てくる、というような話しです。これら信仰物語は伝承され、BC5c頃のペルシャ支配の時代に各章ごとの原文書が成立し、アレクサンダー帝国崩壊後BC４c頃のエジプトの緩い支配の時期に一つの文書としてまとめられた、と推測されます。問題は7章以降です。7章はバビロニア、ペルシャの公用語であり世界語になりつつあったアラム語で書かれていますが8章以降は再びヘブル語の文書に戻っています。そして7章から12章までがダニエルの見た幻を叙述した文書です。黙示文書の先駆け的な文書です。イスラエルの地はエジプトの緩い支配からアケメネス朝シリアの支配下に入り、イスラエル社会は漸次ヘレニズム化が進みました。他方、これに抵抗するハシディームの流れが地方の祭司層において強くなっていきました。そこに、BC175、ローマより帰ったアンティオコスIV世エピファネスがシリア王となりました。彼は神殿を荒らし、ギリシャ文化を強制し、ジュピター信仰を強制し、安息日・割礼や食物規定などの律法遵守を禁止したりしました。ダニエル書の7章以降はその頃の文書と推測されます。7章の背後にはこのエピファネスの迫害がいろ強く感じられます。また11章はペルシャとギリシャの戦い、その後の、シリアとエジプトの戦いそのものに関する叙述です。それが、終末の時に関する幻のかたちをとって記されているのです。

イスラエル始まって以来とも言うべき、大宗教迫害の下で書かれた文書である、ということを覚えておいてください。もちろん、イスラエル・ユダヤは外国との幾多の戦争を経験していますが、この時の特徴はユダヤ内部が分裂状況にあり民族としての一体性が失われていた、という点です。シリアによるヘレニズム化を積極的に進めるグループが内部にいました。経済的に豊かとなった貴族階級とも言うべき層です。後に、このような上層階級はサドカイ派と呼ばれました。これに対し、イスラエル・ユダヤの伝統を守ろうとしたのが中小商工業者や知識人層を中心とする中間階級でした。これが後にパリサイ派となる流れです。ヤハウェを唯一神として仰ぐ伝統的共同体はもはや存在しない状況になっていました。このことが復活信仰が明確になって行く契機になっています。今や、イスラエル共同体の未来に個々人の死後の希望を委ねることができなくなっていたのです。そしてダニエル書が書かれた直後に伝統的信仰派であるマタティアの対シリア反乱が起きることとなるのです。ダニエル書は迫害の下にある彼らを勇気づける文書であったのです。

では具体的にダニエル書の出てくる幻としての登場者をみてみます。まず最初は3:28、6:22に出てくる「御使い」です。この言葉は「la:ak」という「使者を送る」という意味のアラム語が分詞となり「mal-a:k」となり、使者・御使いの意味になったことばです。複数形は「marua:ke:m」です。これのギリシャ語訳は「angelos」です。ラテン語では「angelus」で英語で「angel」になった言葉です。従って日本語で「天使」と訳されているエンジェルのそもそもは「御使い」です。神の使者のことです。創世記19:1に「そのふたりの御使いは夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところにすわっていた。ロトは彼らを見るなり、立ち上がって彼らを迎え、顔を地につけて伏し拝んだ。」とあります。これはソドムの町にいたロトが神からの使者を迎えるところであり、「顔を地につけて伏し拝んだ」と言われているところからみて、地上の人間とはみられていなかった、と思われます。肉体をとっているか、霊的な体かは別として、神がこの地上に遣わした存在です。

この「御使い」はダニエル書の中でいろいろな表現で出てきます。10:5や12:6、12:7の「亜麻布の衣を着た人」もその一つです。10:5では「私が目を上げて、見ると、そこに、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、腰にはウファズの金の帯を締めていた。」とあり、12:6では「それで私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人に言った。「この不思議なことは、いつになって終わるのですか。」」とダニエルは苦難はいつまで続くのですか、とこの人物に聞いています。この答えが「ひと時とふた時と半時」という謎めいた言葉です。これは「1年＋2年＋半年」で3年半のことだと解釈されています。この「亜麻布の衣を着た人」と言う表現はレビ記6:10の「祭司は亜麻布の衣を着なさい。また亜麻布のももひきをその身にはかなければならない。」という言葉から、祭司を指している表現です。これが、最初のまとまった黙示文書であるエゼキエル書で天的存在に高められ使用されるようになりました。10:6に「主が亜麻布の衣を着た者に命じて、「車輪の間、すなわちケルビムの間から火を取れ」と仰せられたとき、この人は入って行って、一つの輪のそばに立った。」とあります。地上の人間ではありません。神の御使いです。

更に、ダニエル書では、この神の使者が名前で表現されています。ミカエルとガブリエルです。10:13、10:21、12:1の三箇所にミカエルが出てきます。12:1で「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。」とあることから、イスラエル・ユダの守護天使とされました。ガブリエルは8:16で「私は、ウライ川の中ほどから、「ガブリエルよ。この人に、その幻を悟らせよ」と呼びかけて言っている人の声を聞いた。」とあり神の声と想像される声がダニエルに幻の意味を悟らせる御使いとして述べられています。また8:13で「私は、ひとりの聖なる者が語っているのを聞いた。すると、もうひとりの聖なる者が、その語っている者に言った。「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪、および、聖所と軍勢が踏みにじられるという幻は、いつまでのことだろう。」と言われ、ダニエルが二人の聖なる者の会話を聞いていますが、「もう一人の聖なる者」は文脈からみてガブリエルのことであろう、と解釈できます。7:16には「私は、かたわらに立つ者のひとりに近づき、このことのすべてについて、彼に願って確かめようとした。すると彼は、私に答え、そのことの解き明かしを知らせてくれた。」とあり、二人の幻が登場しますが、これ等は、まだ名前を得る前のミカエル、ガブリエルとも考えられます。いずれにしろ、御使いたる天使が名を得て居ることは重要です。

この名を得た天使はこのあと黙示文書の中で拡大されていきます。その原文書がBC3c頃にできたと言われている第一エノク書「寝ずの番人」の20章にはハイレベルの天使の名前があげられています。20:1-7をお読みします。「以下は、寝ずの番人をつとめる聖なるみ使いたちの名前である。ウリエル、聖なるみ使いのひとり、世界とタルタロスを見守る。ラファエル、聖なるみ使いのひとり、人間の霊魂を見守る。ラグエル、み使いの一人、世界と光に復讐する。ミカエル、聖なるみ使いのひとり、人類の中でも最優秀な部分、（すなわち神の選）民をゆだねられている。サラカエル、聖なるみ使いのひとり、霊魂を罪にいざなう人の子らの霊魂を見守る。ガブリエル、聖なる天使のひとり、蛇と（エデンの）園とケルビムを見守る。」とあります。ミカエル、ガブリエルはここに既にあります。ダニエル書7章以降の方が第一エノク書の成立の後、と推測されますから、ダニエル書の記者は、既にあった天使物語のなかから、この二者の名をあげたのではないか、と思われます。

第一エノク書には、更に、この下の天使の名前も挙げられています。6:7では「以下はみ使いたちの名である。彼らの長（かしら）たるシュミハゼ、アラキバ、ラメエル、コカピエル、アキベエル、タミエル、ラムエル、ダネル、エゼケエル、バラクエル、アサエル、アルメルス、バトラエル、アナニエル、ザキエル、シャムシャエル、サルタエル、トウルエル、ヨムヤエル、サハリエル。」と20の御使い、の名があげられています。エノク書は偽書と称せられ、聖書には入れられなかった文書です。ここに述べられている天使はダニエル書には挙げられておりません。中世カソリック教会でこれらの天使の一部が復活し、壮大な天使論が作られていきます。以上の「御使い」「亜麻布の衣を着た人」「天使」はその使用されている言葉、登場の仕方からして「御使い」の系列に属します。天的存在ではあり、人間とは別ですが、神の御使いであり、自らが神と同列にあるものでは全くありません。

ではこの「御使い」の系譜は新約聖書ではどのように扱われているでしょうか。まず「御使い」と表現されている新約の箇所をみます。マタイ4:6「言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから。」これは主イエスへの「試み」の箇所で、サタンが「御使いがイエスを支えてくれるはずだ」と誘惑の言葉をかけるところです。もっともなことを言っているので誘惑になるのです。真っ赤なうそなど誘惑の言葉にはなりません。その他、新約には「御使い」は多数でてきますが「使徒の働き」7:30では「四十年たったとき、御使いが、モーセに、シナイ山の荒野で柴の燃える炎の中に現われました。」と記されていることからして、旧約における「御使い」の使用方法と変わりません。人間ではない天的存在です。ただし、ヨハネ黙示録は少々違います。そのことは後ほど申し上げます。

次は「亜麻布の衣を着た者」ですがこのままの表現では新約聖書には現れませんが、マルコ15:46には「そこで、ヨセフは亜麻布を買い、イエスを取り降ろしてその亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納めた。墓の入口には石をころがしかけておいた。」という描写があります。神の権威の下にあった人の死体は亜麻布に包み葬る、ということであったようです。イスラエル執成しの大祭司として扱う、ということです。また黙示録19:14では「天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布（あさぬの）を着て、白い馬に乗って彼につき従った。」とあり、天の軍勢が「きよい麻布」を着ていたと書かれており、この「麻布」というギリシャ語はダニエル書における「亜麻布の衣を着た者」の「亜麻布」と同じです。この表現と繋がっていると考えられます。内容的には旧約の表現が新約の時代にも引き継げられている、と言って良いでしょう。神の御使い、と同じ天的存在です。

更に名前の付いた御使い、即ち、天使についてみてみます。新約に登場する天使はミカエルとガブリエルのみです。ダニエル書に登場する天使と同じです。中間期黙示文書で沢山の天使が述べられているにも関わらず新約正典ではダニエル書に登場する2人の天使のみである、ということです。イスラエルの正統的信仰では観念的に天的存在を多数考え、それを擬人化して信仰に結びつけることは好ましくはない、と考えられていた、と推測されます。あくまでも天上の存在、神秘的な存在を認めるのには極めて抑制的であった、ということです。名前をつけるとどうしても擬人化の傾向がでてきて偶像礼拝に傾斜しがちだ、ということです。新約でガブリエルが登場するのは、ルカ1:26です。「ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女（おとめ）のところに来た。」とあり、マリアの処女懐胎のところです。この前で、ザカリヤへの「神の子」誕生予告のところにも出てきます。この2個所だけです。ミカエルもヤコブ書1:9と黙示録12:6の二箇所のみです。黙示録12:6では「さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが」とありますが、この場面はダニエル書12:1と似ています。「名前のついた御使い」即ち天使の登場場面はダニエルの伝統が新約の時代にも引き継がれていた、と言えます。

以上から、旧約聖書における「御使い」の系列である「御使い」「亜麻布の衣を着た者」「天使」は正典聖書での旧新約でほぼ同じように使われている、と言うことができます。

次にダニエル書7章を見てみます。7:13-14には「 私がまた、夜の幻を見ていると、 見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、 年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、 諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、 彼に仕えることになった。 その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、 その国は滅びることがない。」とあります。まず「年を経た方」ですが口語訳聖書では「日の老いたる者」と訳されていた言葉であり、こちらの方が直訳です。「月日の中で高年齢の者」ということで、一言で言えば「老人」です。神様を描写した絵で老人の姿で描かれる例がありますが、これはここから来ています。この方は神の王国の主権者そのものですから、イスラエルの信仰の系譜からみて神そのものです。それ以外はありえません。問題は次の「人の子のような方」です。神ご自身から神の国の主権を受け継いでいる方ですから、単に神から派遣された御使いとは違います。「人の子のような方」であり「人の子」そのものではありませんから、この地上の人間でもありえません。従って預言者でもありません。神の主権的な力のすべてを受け継いでいる方ですから神ご自身と言っても差し支えありません。しかし、神自身ではありません。御使いでもなく神ご自身でもない方がここに登場します。天的存在という表現とは別に神的存在という表現を使えば神であり神でない神的存在がダニエル書で言われている、ということです。

類似の表現をみてみます。エゼキエル書1:26「彼らの頭の上、大空のはるか上のほうには、サファイヤのような何か王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。」とあります。ここに登場する「人間の姿に似たもの」はその描写からして神ご自身を指しているとも見えますが、「人間」に類比されているところから見てイスラエル信仰における神ご自身ではありえません。ダニエル書における「人の子のような方」の先駆けと考えれば辻褄が合います。多くの学説もこの両者の言葉に連続性を見ています。また8:2には「火のように見える姿」というのが描写されていますが、これも神ご自身の御手に続く表現ですので神的存在のどなたかのことです。ダニエル書でも7:13のあと、類似の表現がでてきます。8:15「人間のように見える者」、10:16「人の姿をとった者」、10:18「人間のように見える者」という表現です。このうち「人間のように見える者」は御使いであることはほぼ明らかですが10:16の「人の姿をとった者」は神的存在か天的存在かは微妙です。10:16では「ちょうどそのとき、人の姿をとった者が、私のくちびるに触れた。」と言われており、18節では「すると、人間のように見える者が、再び私に触れ、私を力づけて」くれた、と言っています。「人の姿をとった者」がダニエルのくちびるに触れ、という内容になっています。ダニエルは主と直接話すことはできない、と吐露したところ、このダニエルの嘆きに答えて、「人間のように見える者」即ち主なる神の御使いがダニエルに触れ、力づけてくれた、という話です。この文脈からすると「人の姿をとった者」が先ほどの「人の子のような方」のことだと解釈できる余地は十分あります。「人の姿をとった者」ののヘブル語を直訳すると「人の子らに似たような者」ということになります。アラム語とヘブル語、単数と複数の差はありますが、7:13の「人の子のような方」と10:16の「人の子らに似たような方」は繋がっているようです。この10:16の「人の子らに似たような方」はダニエルの唇に触れるのみで直接、声はかけて居ません。神的存在でありますがダニエルに直接現れ、声をかける存在ではありません。

これが新約聖書ヨハネ黙示録では1:13と14:14の二箇所に、ダニエル書7:13と同じ「人の子のような方」の表現がでてきます。1:13-14では「それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。/その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。」とあり、神ご自身またはそれと同一視されるべき神的存在者として描写されています。14:14-15では「また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。/すると、もうひとりの御使いが聖所から出て来て、雲に乗っておられる方に向かって大声で叫んだ。「かまを入れて刈り取ってください。地の穀物は実ったので、取り入れる時が来ましたから。」と記されています。御使いが「雲に乗っておられる方」即ち「人の子のような方」に裁きの願いを叫んでいます。やはり、ここでも「人の子のような方」は神ご自身に近い存在で、御使いからの願いを受ける者、とされています。このエゼキエル書、ダニエル書、ヨハネ黙示録に登場するのが「人の子のような方」です。「人の子」そのものは旧約聖書、中間期文書特に第一エノク書、新約聖書に多数登場していますが、「人の子のような方」はこの「人の子」とは区別されるべきです。「人の子」についてのイメージが底流にあって、神ご自身とは区別された神的存在に対する表現として「人の子のような方」という表現が使われている、と言えると思われます。ダニエル書にも「人の子」という表現がでてきますが、エゼキエル書における預言者エゼキエルへの呼びかけの言葉として使われているのと同様に預言者ダニエルに対する呼びかけの言葉です。神的存在への表現ではありません。ヨハネ黙示録には「人の子」ということばそのものはでてきません。

このダニエル書7:13の「人の子のような方」というのがキリスト教の歴史の中で、イエス・キリストの予型（予め示された型）である、とされたのです。神ご自身とは区別された神的存在であり、御使い・天使という天的存在を従える方ということで考えれば、我々クリスチャンから言わせれば主イエス・キリストそのものではないか、と言えると思います。

では人間としての存在でありながら、一種の神的権威を有し、天的存在ともいえる者となった人々はどうなのか、という点です。ダニエル書には「聖徒」という言葉がでてきます。7:18に「いと高き方の聖徒たちが、国を受け継ぎ、永遠に、その国を保って世々限りなく続く。』」とあります。「いと高き方」とは神ご自身ですから、「聖徒」は神の聖なる僕です。ダニエル書の書かれた時の時代状況から考えると、当時、迫害の中にあってヤハウェ信仰を守っていたエルサレム神殿の祭司が念頭にあったものと思われます。敬虔主義者、ハシディームです。この「聖徒」の言葉はヘブル語の「聖である」とい意味の「ka:dash」のアラム語名詞「kado:sh」が使われています。ヘブル語でも同じ発音です。ダニエル書では更に7:21、7:22、7:26、7:27において登場する言葉です。7:27では「国と、主権と、天下の国々の権威とは、 いと高き方の聖徒である民に与えられる。 その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』」とあり、「いと高き聖徒の民」という言い方で出てきます。この民はイスラエルの民と考えられますから「聖徒」はその宗教的指導者が念頭にある、と考えられます。「国を受け継ぐ」ことに関連している点は7:18と同様です。ギリシャ語では「hagios」という「聖なる者」の意味の言葉です。旧約聖書でこのヘブル語、ギリシャ語の組み合わせの箇所を探すと詩篇16:3「地にある聖徒たちには威厳があり、 私の喜びはすべて、彼らの中にあります。」の「聖徒」が該当します。同じく詩篇34:9「主を恐れよ。その聖徒たちよ。 彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。」の「聖徒」です。ともにダビデによる神賛美の詩です。「地にある聖徒」ですから地上の人間のことです。旧約聖書には他にも「聖徒」と訳されている言葉がありますが、ヘブル語かギリシャ語が異なっています。従ってヘブル語・アラム語の「kado:sh」ギリシャ語「hagios」の「聖徒」は敬虔な信仰者の内、指導的立場にある人のことを指します。英語では「saint」になります。日本語では「聖者」とも訳されています。仏教では解脱者です。

新約聖書ではこの「聖徒」はどのような意味で使われているでしょうか。使徒の働き26:10「そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を授けられた私は、多くの聖徒たちを牢に入れ、彼らが殺されるときには、それに賛成の票を投じました。」とありますが、これはパウロが自分の過去について語ったところであり「聖徒」は主イエスの直接の弟子、いわば「使徒」のことを指しています。ギリシャ語、ヘブル語訳新約聖書での言葉は、ダニエル書と同様、「hagi:o」「kado:sh」です。その他、パウロの手紙でも使用されています。第一コリント16:1では「さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたように、あなたがたにもこう命じます。」とありますが、「聖徒」とは主イエスの弟子の事です。黙示録でも「聖徒」はしばしばでてきますが、ダニエル書と同様、敬虔な人々のことを指しています。ダニエル書における「聖徒」と類似の表現が多々あります。黙示録16:6には「彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しましたが、あなたは、その血を彼らに飲ませました。彼らは、そうされるにふさわしい者たちです。」とあり、「聖徒」は過去の偉大な預言者と同列に並べられています。ここから、殉教者が「聖徒」と呼ばれカソリックの伝統では「聖人」「聖者」としてあがめられる歴史が作られていくことになります。

旧約聖書には「聖徒」に近い表現として「神の人」という表現があります。申命記33:1「これは神の人モーセが、その死を前にして、イスラエル人を祝福した祝福のことばである。」と言われています。最初の預言者モーセが「神の人」と呼ばれているのです。第一サムエル9:6「すると、彼は言った。「待ってください。この町には神の人がいます。この人は敬われている人です。この人の言うことはみな、必ず実現します。今そこへまいりましょう。たぶん、私たちの行くべき道を教えてくれるでしょう。」とあり、ここで「神の人」とはサムエルのことです。第二サムエル1:12「エリヤは彼らに答えて言った。「もし、私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたと、あなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。」すると、天から神の火が下って来て、彼と、その部下五十人を焼き尽くした。」とある時の「神の人」はエリアです。偉大なる預言者は概ね「神の人」と呼ばれています。ネヘミヤ書ではダビデを「神の人」と呼んでいます。信仰者の鏡、という意味合いと思います。新約ではテモテの手紙で2度使われていますがかなり拡大されて「真の信仰者」の意味で使われています。

「聖徒」というダニエル書に現れる表現は聖書著者からみて「真の信仰者」とも言える人間のことで、この言葉は旧約の伝統的文書では「神を賛美する者」のことであり、ダニエル書ではエルサレム神殿の祭司集団であり、新約にあっては主イエスの愛（まな）弟子のことです。「神の人」は旧約では預言者を指しており、旧約的表現では「義人」です。この言葉は新約ではもっと広い意味で「真の信仰者」の意味で使用されるようになっています。「聖徒」も同様に黙示録では、指導的立場の人間かどうかにかかわりなく「真の信仰者」を指して言われています。黙示録18:20では「おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです。」 と言われており、聖徒、使徒、預言者が並べて語られています。まとめると、「神の人」「聖徒」は旧約の歴史から中間期において「真の信仰者」を意味する言葉に広げられていき、新約に繋がって行く、と見ることが出来ます。新約ではその「真の信仰者」の代表が使徒なのです。

以上もうしあげたことから、①イスラエル信仰の「主なる神」である「いと高き方」、②その神と本質的には同一の神的存在であるが神の使者以上の者「人の子のような方」、③「御使い」「亜麻布の衣を着た人」「天使」として表現されている天的存在である「神の使者」、④「人間ではあるが偉大な預言者のような「真の信仰者」である「神の人」即ち「聖徒」という四つがダニエル書の幻の中で見出される登場者です。一言づつで言いますと、「神」、「ような方」、「御使い」、「聖徒」です。私たちクリスチャンにとって決定的に重要なのはこの「ような方」なのです。この最初の三者が「父、子、聖霊」の三位に対応しています。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日の礼拝の時をありがとうございます。主なる神の御言葉に聞く機会をお与えくださってありがとうございます。今日はダニエル書に語られる幻に登場する様々な人のことについて学びました。主なる神、ような方、御使い、聖徒などが記されています。中でも「人の子のような方」と言われている方は黙示録にも登場しています。この方こそ私たちの主イエス・キリストです。旧約の歴史の中で指示（さししめ）され、人となられた神、十字架と復活、そして来（きた）るべき方として再び指し示されている方です。どうか私たちをその方に従う者とさせて下さい。主のみ名により祈ります。アーメン）